



## 加齢黄斑変性について

千葉県医師会理事

日比野久美子 医師



### 加齢黄斑変性とは？

人間の眼はカメラと同じ構造ですが、網膜はカメラでいえば、フィルムに相当します。網膜の中心部を黄斑部といい、視力を司る大切な細胞が集中しています。日本でいえば首都、東京のようなもので、視機能の重要な中枢ですね。黄斑変性とは、この黄斑部がやられてしまう病気です。その原因としては、加齢が最大の原因ですが、喫煙や遺伝、肥満との関係もいわれています。加齢などにより、黄斑部の色素上皮、脈絡膜というところが

たみ、視細胞がやられると、ものを見ようとする中心がぼやけたり、ゆがんだりしてきます(変視症)。進行すると、見ようとするところが暗くなり(中心暗点)、視力も落ちてしまいます。この病気は、欧米諸国では、失明原因のトップでしたが、日本人には比較的少ないといわれてきました。しかし、高齢者の人口増加や食事、生活習慣の欧米化に伴い、最近日本でも、患者さんが急増。現在、視力障害疾患の第4位を占めるようになりました。

加齢黄斑変性には、浸出型と萎縮型という2つのタイプがあります。前述したように黄斑部の色素上皮、脈絡膜というところがいたむと、脈絡膜から、新生血管と呼ばれる悪い血管が発生してきます。この新生血管はもろくてすぐに破れてしまうので、出血したり、血液成分が漏れ出して黄斑部にむくみ(浮腫)をつくることで、視力の低下をひきおこすのです。

浸出型は新生血管が発生し、進行がはやい、一方、萎縮型は新生血管はなく、黄斑が栄養不足になることで萎縮をしていくもので、進行も遅いといわれています。しかし、新生血管が発生することもあるので、やはり注意が必要です。

### 加齢黄斑変性の検査について

変視症や中心暗点のような症状を感じたら、すぐに眼科に行きましょう。眼科では、視力検査や眼底検査のほか、造影剤を使っ

た検査(蛍光眼底造影など)や視野測定を行います。最近では光干渉断層計(OCT)という3次元的に網膜の立体構造まで解析できる機械も活用され、この疾患の正確な診断がなされるようになってきました。

### 加齢黄斑変性の治療について

治療には、①レーザー光凝固術(新生血管をレーザー光で焼いて固めてしまう方法)②光線力学的療法(PDT: photodynamic therapy)新生血管に集中しやすい光に反応する物質を注射した後、弱いレーザーを照射して、新生血管を退縮させる方法、③抗血管新生療法(新生血管を増殖させる血管内皮増殖因子(vascular endothelial growth factor: VEGF)という分子の作用を抑制する抗VEGF製剤を眼内(硝子体内)に注射する方法)などがあります。また、外科的手術が行われることもあります。

抗血管新生療法を中心とした、ここ数年の治療法の進歩は驚くべきものがあり、今まで視力を失っていた多くの方々が、助かるようになってきました。シルバー世代の方々は是非知っておくべき疾患であり、禁煙を心がけるなどの生活習慣の見直しも大事です。

また、方眼紙のようなマス目を片眼ずつ見るチエック法(中心部がゆがんだり、ぼやけて見えないか)は早期発見につながりますので、試してみてくださいね。